

語りを言葉に——情報を編集する

学習院中等科教諭
甲斐伊織

使用教材…「桜守三代」（二年）

1 はじめに

膨大な情報があふれる今日、生徒には自ら情報を取捨選択して再構築する力¹を編集する力をつけさせたい。それには、資料を読むだけではなく、得た情報を編集したうえで発表するという学習が効果的である。

「桜守三代」は、筆者の鈴木嘉一²が、佐野藤右衛門から話を聞いて得た多くの情報を編集して書いた文章である。ここでは、これを「聞き語り文」とよぶ。この文章からは、桜守の内実や歴史、そして何より佐野藤右衛門の魅力が伝わってくる。聞き語り文は、話を聞いて得た情報を編集して、その人物の魅力を伝える文章といえる。

本教材に学び、生徒に、人物の語りを編集する経験をさせたい。本単元では、著名人の自伝（※1）を「語り」とし、そこから得た情報を編集して、聞き語り文を書く。

2 指導計画（全七時間）

■目標

- 「桜守三代」を読み、聞き語り文の構成や文体を理解する。
- 著名人の自伝を読み、得た情報を各自で編集し、聞き語り文にまとめる。
- 同じ資料を用いていても、異なる編集の方法があることを知る。

授業前

- ・単元で扱う資料を「国語教室通信」（※2）で紹介し、生徒の興味・関心を耕す。

第一次（二時間）

- ・「桜守三代」を読み、聞き語り文の構成要素や文体を押さえながら、佐野藤右衛門の魅力を伝える書き方を捉える。
- ・著名人の自伝「わたしが子どもだったころ」から、各自が担当する人物を決める。

第二次（三時間）

- ・前次で確認した聞き語り文の構成要素や

作成を担当することになる。

生徒には、資料に選んだ著名人全員の簡単なプロフィールを紹介して、担当したい人物を第三希望まで募り、その結果に基づいて担当を割り振った。その後、「その人について紹介するのは、このクラスに二人だけ」と伝え、各自伝を配布した。自分が興味のある人物を担当できると、他のほとんどの生徒とは違った人物を担当することから、生徒はそれぞれ真剣に資料と向き合っているようだった。

(3) 聞き語り文にまとめる

「桜守三代」から読み取った三つの要素を観点として、各自の資料を読み込む。読み進めながら、聞き語り文にまとめる際に利用できるような箇所を選択していく。

書く活動に入る前に、教師が用意した手引きを用いて、構成と文体の再確認を行った。手引きには具体例として、教師自らの体験に基づく聞き語り文を示し、書くときの注意点を、生徒が具体的に捉えられるようにした。主な内容は、次のとおりである。

- ・聞き語り文の文体……まとめる側が経験したかのように、言い切りの形で書く。
- ・具体的なエピソード……5W1Hがわかるように、資料の記述をもとに書く。地の文と引用文を混ぜてもよい。

- ・資料からの引用……必ず一つは入れる。その人の魅力や特徴が最も出ているところを選ぶ。

- ・人物をまとめる一文……その人物の魅力や特徴がよく出るよう工夫する。

生徒が実際に書いた、作家・よしもとばななの聞き語り文の一部を左に紹介する。

父は思想家、母は俳人、姉はのちの漫画家という個性的な家族の下で育ったよしもとはなは、いつでも見えないところで支えてくれる家族の優しさを感じていた。

そして、学校での友達。よしもとはななの今後の人生を左右する人が二人いたという。「自分というものがちゃんとあれば、どこにいても自分は自分だということを教えてくれたのは彼女でした。」と、当時の小学生の友達、じゅんちゃんについては、「幸せ」というものを学んだのだ。

もう一人の友達はさかい。さかいは、馬鹿がつくほどまじめで、少し変わっていたが、心の優しい子だった。よしもとはなにとっては、さかいは自分の心を救ってくれた存在といっても過言ではない。

そうやって、いつでもだれかが別に優しくせず、ただそばにいてくれたことが、今でもよしもとはななの大きな力になっているのだ。

文体を活用しながら、著名人の自伝を資料とした六百字程度の聞き語り文を書く。

第三次（二時間）

- ・各自の聞き語り文を文集にして共有し、担当した人物についてペアで発表する。

3 指導の工夫・学習の実際

(1) 聞き語り文の構成・文体を捉える

「桜守三代」を読み、インタビューによって得た情報を編集して表した聞き語り文であることと、その構成や文体について確認する。聞き語り文は「人物のエピソードの紹介」「言葉の引用」「人物を表すまとめの言葉」から構成される。これらは、聞き語り文を書く際に必要な三つの要素となる。

(2) 興味に応じた資料を選択する

「わたしが子どもだったころ」の中から、教師が二十名分の自伝を選択し、資料とした。クラスの生徒数は四十名前後であるため、二名の生徒が同一人物の聞き語り文の

(4) 文集にまとめ、ペアで発表する

全員の聞き語り文を文集にまとめた。その後、編集方法の共通点・相違点を確認するために、まとめの発表会を行った。

生徒は、同じ人物を担当したもう一人の生徒の聞き語り文を、文集で初めて読むことになる。聞き語り文には、生徒一人一人によるその人物の捉え方が表れる。同じ資料をもとにした聞き語り文であっても、編集のしかたによって相違点が生じるのである。ペアで意見の交流を行い、共通点・相違点を確認した後に、担当した人物のエピソードや人物像についてクラスで発表した。

4 おわりに

中学校一年生にとって、「得た情報を、目的に応じて自分なりに編集する」ことは初めて経験する学習活動であった。教科書教材は、そのような表現活動に際して、格好の「お手本」となる。教材で学んだことを活用して表現することによって、教材自体への理解の深まりも期待できる。

「編集」は、学習指導要領上は三年の言語活動ではあるが、一年生でも十分にこなすことができる。今後さまざまな場で、編集する活動を積み重ねていきたい。

※1 「わたしが子どもだったころ」（NHK「わたしが子どもだったころ」制作グループ編／ポプラ社／全3巻）を資料とした。
本書は、さまざまな分野で活躍する著名人（全39名）が自身の幼少期について語ったことを、自伝の形式でまとめたもの。
※2 学習の見通しや言葉に関するコラムなどをまとめ、月1回、生徒に配布しているプリント。

「事実」のあるとない

使用教材：「小さな町のラジオ発——臨時災害放送局『りんごラジオ』（二年）

1 はじめに

ノンフィクションを読み、「いい話だ」としみじみ感じることが、読書体験の一つとして大切だ。しかし、国語の授業で扱うならば、それを読むことで、生徒が何らか「言葉」の新たな側面に出会えるようにしたい。

この四月、生徒たちと一つの新聞記事（※1）を読んだ。東日本大震災のその後について書かれ、被災地で語られる「復興」や「絆」と、いわゆる「東京発」で語られるそれとの違いを指摘した記事である。「被災地の実態を東京の人に伝えよう」として、使う言葉の意味が違っている」という事実、生徒たちは、日常、軽く用いていた「絆」という言葉を見つめ直すきっかけを得た。

臨時災害放送局「りんごラジオ」の活動も、被災地を飛び出して「情報」として届けられるとき、何かが切り落とされるのではないか。そう考え、本単元では本教材を、

新聞記事や実際の「りんごラジオ」の放送（録音）と合わせ、一つの「情報」として読むこととした。生徒たちは、単一の情報だけで事実を知った気になりがちだ。彼らに、「りんごラジオ」に関わる多様な情報を吟味することを通して、自分の中に立ち上がる「りんごラジオ」の活動の意味に迫るという体験をさせることを試みた。

2 指導計画（全四時間）

■目標

○多様な方法で選んだ本や文章などから適切な情報を得て、自分の考えをまとめる。

第一時

・四月に読んだ記事を読み出し、単元のめあて「メディアの特徴を生かして『りんごラジオ』の事実を迫る」を確認する。
・情報分析①……「りんごラジオ」に言及した三つの新聞記事（朝日新聞・日本経

済新聞・河北新報）を読む。そこから読み取れた事実をワークシートに整理し、グループで吟味する。

第二時

・情報分析②……本教材の範読を聞く。そこから読み取れた事実をワークシートに整理し、グループで吟味する。

第三時

・情報分析③……デジタル教科書所収の「りんごラジオ」の放送を聞く。そこから聞き取れた事実をワークシートに整理し、グループで吟味する。

第四時

・本教材を各自で再度、黙読する。一回目に読んだときには気づかなかったことや読み飛ばしていたことを交流する。
・単元のまとめのレポートを作成する。
（課題…被災地における「りんごラジオ」の活動がどんな意味をもっているのか、さまざまな情報分析を通して自分なりにつかんだ「事実」をまとめなさい。）

3 指導の工夫・学習の実際

(1) 学びのつながりを意識させる

本単元では、これまでの学習と関連づけた導入を行ったり（左写真）、総合的な学習の時間での個人研究の実態（インターネットの情報に頼りがち、資料を一度読んだだけでわかった気になる等）に関連づけるなどの指導を工夫したりした。

情報から読み取れたことをグループで吟味する際には、各メディアの特徴を確認しつつ、「わかったこと」だけでなく、「それでもわからないこと」や「もっと知りたくなったこと」を明らかにすることを重視し、探究活動における情報収集のスキルにつなげようとした。本単元は、今後、教科書教材「メディアと上手に付き合うために」（池上彰）の学習へとつなげる予定である。

(2) 音声メディアを活用し、教材を再読させる

今回は、教科書教材のノンフィクションに加え、新聞記事、さらにはラジオ放送という聴覚教材を「情報」として取り上げた。



4月に読んだ新聞記事を読み返す生徒たち

なかでも生徒たちからの反響が大きかったのがラジオ放送である。

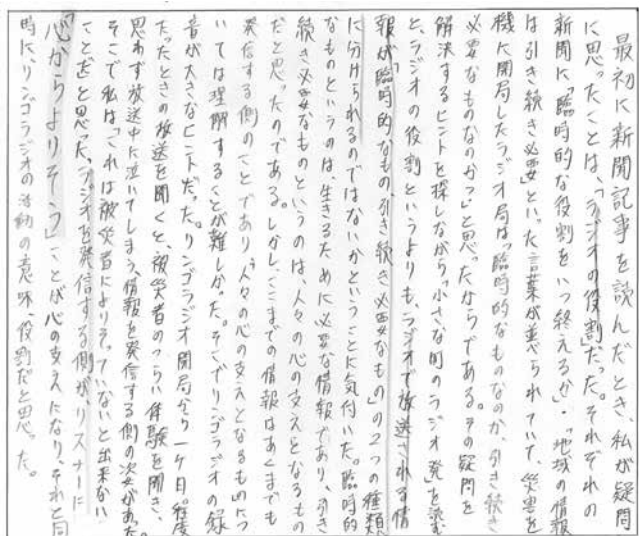
新聞記事と本教材を読んでもわからないこととして、生徒から挙がっていたのが、「ラジオのリスナーが、放送をどんな思いで聞いているのか」という疑問であった。ラジオというメディア自体になじみのない生徒が多いなか、テロップなどの視覚情報に頼らずに、リスナーになりきって、話す人の息遣いや間（ま）に耳を澄ますことから得られた情報量の多さは驚きだったようだ。

そのことが、第四時に本教材を再読する動機となった。文章中で繰り返強調されている「声」の力とともに、複数の情報を重ねることで、新たな気づきがあることを多くの生徒が体験し、理解した。

生徒が書いたまとめのレポートには、次のような記述が見られた。「ラジオの録音を聞いた後にノンフィクションをもう一度読むと、初めに読んだときには響かなかった言葉が心に残った。」「それぞれのメディアでわかったことを組み合わせると、最初の疑問がいくつも解決できた。」「しっかり情報を集めたつもりでも行き詰まるときがある。そんなとき、一度読んだ情報に戻ってみる。言葉は一度読み返すとまた違った見方ができるからである。」「

4 おわりに

生徒たちは、本単元を通して、「事実」にたどり着くことの難しさを実感したようだ。それは、私たちが学ぶことの意味そのものである。これまであまりなじみなかったノンフィクションというジャンルやラジオというメディアの特徴を知った生徒たちが、今後、より豊かな探究活動へ向かうことを願う。



生徒が書いたレポート

※1 「『復興』『絆』なんか違う」（朝日新聞 2016年3月25日付）

今、世界のどこかで——ノンフィクション作品の紹介をしよう

筑波大学附属中学校教諭
細川李花

使用教材…「エルサルバドルの少女ヘスース」(三年) ※本実践では二年を対象とした。

1 はじめに

世界で起こる災害や事件、私たちが直面する課題について、生徒たちはテレビ等の報道を通じて触れている。しかし、日常の中で、それら自分から遠い出来事とは距離を置きがちになる。未来を築く彼らには、広く世界に目を向け、解決すべき課題を認識したうえで日々を過ごしてもらいたい。

本教材は、遠くエルサルバドルで生きる少女に焦点を当てたノンフィクションである。筆者は、長年にわたって何度も現地を訪れ、少女を取材し続けた。

筆者特有の視点や思いが表れた本教材をきっかけとして、生徒に、さまざまなノンフィクション作品と出合わせ、その魅力を感じさせたい。私たちが直接知りえない人々の姿を伝えるノンフィクションというジャンルの文章に親しむ第一歩として、本単元を設定した。

2 指導計画(全五時間)

■目標

- 工夫を取り入れながら、ノンフィクション作品の魅力を短い文章にまとめる。
- ノンフィクションを読み、世界で起きている出来事や筆者の思いについて自分の考えをもつ。
- さまざまなノンフィクションに出会い、広く世界を知る意欲をもつ。

第一次(一時間)

ノンフィクションと出会う

- ・身近な話題を扱ったノンフィクション作品に触れる。
 - ・「エルサルバドルの少女ヘスース」を読み、印象に残ったワンフレーズを挙げる。
- 第二次(二時間)**
- 本の魅力を文章にまとめる**
- ・教師が作成した「紹介文モデル」を読み、ノンフィクション作品の魅力を伝える

3 指導の工夫・学習の実際

- 紹介文に書くべき内容を考える。
 - ・自分が選んだ本の紹介文を、四百字程度で書く。
- 第三次(二時間)**
- 本を紹介し合う**
- ・自分が選んだ本の紹介をする。
 - ・友達の紹介を聞き、読みたい本を挙げる。
 - ・全員の紹介文をまとめた冊子を読む。

(1) 身近な話題を扱った作品に触れる

単元の導入として、『いのちの食べかた』(森達也/イースト・プレス)等、複数のノンフィクション作品の一部分を生徒に紹介した。外国での出来事を取り上げた本教材に出会う前に、生徒にとって身近な話題を扱った作品に触れさせることで、「身近な事柄であっても、知らないことは多い」という事実気づかせ、知ろうとする態度の重要性を実感させることをねらった。

(2) 世界地図を用いて本を紹介する

本単元では、生徒一人一人がさまざまな作品を手に取り、知る場を設定したいと考えた。そこで、単元名を「今、世界のどこかで」とし、自分が選んだ本を友達に紹介する活動を位置づけた。発表会では、黒板に掲げられた世界地図の前に立ち、本の取材地にシールを貼りながら紹介をする。世界を意識し、どの生徒も楽しみながら本探しや紹介文作りに取り組んでいた。

(3) ワンフレーズを挙げて本を紹介する

本を紹介するにあたっては、目的をもち、作品全体を意欲的に読んでもらいたい。そのため、「自分の心を捉えたワンフレーズを中心に紹介する」という共通課題を用意した。生徒は、魅力的なワンフレーズを見つけるために、作品全体を繰り返し読んでいた。

(4) モデルを使い、紹介文の要素を捉える

共通教材として本教材を読み、心を捉えたワンフレーズを、生徒それぞれに挙げさせた。その後、それらをもとに教師が作成した三種類の「紹介文モデル」を提示し、紹介文に書くべき内容について考えさせた。この活動を通して、生徒は紹介文作りのプロセスをひととおり体験することになる。

書くべき内容について、生徒からは、「ワンフレーズの魅力が伝わるよう、取材対象

- ・置かれた状況や取材の様子を詳細に書く
- ・「取材対象や筆者の生き方・考え方に對する自分の考えを書く」等の要素が挙げられた。それらを踏まえ、紹介文に書くべきこととして、次のような点を押さえた。
- ・取材地の詳細・取材方法・取材対象
- ・ワンフレーズについての説明
- ・ワンフレーズから考えたこと
- ・自分にとっての、その作品の意味

これらの要素を理解し、生徒はとまどことなく書くことに取り組んでいた。また、取り上げたフレーズの異なる三種類のモデルを目にすることで、作品は同じでも、挙げるフレーズは人によって異なるという点に気づいたようだった。その後、自分が選んだ一冊から、最も魅力的なワンフレーズを見つけようとする姿が目立つようになった。

(5) 手引きを参考にして発表会を行う

生徒が発表会の流れをイメージできるように、「紹介文モデル」をもとに、資料の提示のしかたや話の構成などのヒントを示した「発表会の手引き」を作成して提示した。

4 おわりに

発表会では、一人一人の紹介が進むたび、世界地図にシールが増え、生徒は世界各地

で起きている出来事や、友達が紹介する本に興味をもったようだった。普段は小説に興味を抱く生徒が多いが、本単元をきっかけに、彼らがより広く世界を知ろうと求め、ノンフィクション作品にも手を伸ばす機会が増えることを期待したい。

生徒が書いた紹介文

▼わたしの心をとらえた一文

でも、いつから日本人はこんなふうになっちゃったんだろう

○著者……ルネ・ド・マント
○著者……杉本 裕明
○出版年……二十五年○出版社……岩波書店

これは東松山市の中古家電輸出業者の社長、小林茂さんの言葉である。国内のあらゆる場所から集められた家電製品は、不要回収業者の手によつて倉庫に運ばれ、検品・査定されたあと、途上国に輸出される。輸出される前の倉庫の中には、ほぼ使用されていないまま手放された新商品が積み上げられている。小林さんはその山を見ながらそう呟いた。私はこの言葉が物を大切に使って残るといふ、日本人の美徳のようなものが失われつつあることを痛切に感じていると思った。例えば、掃除機が突然壊れたとき、多くの人は修理せずに新品に買い換える。店に行けば製品が沢山あって修理代を支払うよりも安価に手に入る。このような消耗品の増加も、昔から修理を繰り返して使ってきた日本人の行動を変化させたのだろう。実際の不要回収業者がゴミ処理場の現場から、使い捨て文化が浸透し、物に対する敬意をなくした日本人の事態に気づかされるこの本をお勧めしたい。